湊の受難

恥辱の舞台、淫らな罠と快楽の渦

恥辱の舞台、淫らな罠と快楽の渦

生徒会長の加茂悠斗はひとり腕を組み窓の外を見つめていた。
加茂商事の社長子息である悠斗は欲しいものは何でも手にし、なに不自由なく暮らしてきた。その悠斗にとって手に入らないものが出来たのだ。
「はぁ……湊先生……」
くりくりとした愛らしい瞳、長いまつ毛、濡れたような桜色の唇、なにより振りまく色気に惹かれるのだ。
思い切って先日、人のいないところに湊を呼び出し、気持ちを告げた。
だが湊は困ったような顔をすると「ごめんね。生徒との恋愛は禁止な

のもあるけど、僕、君のこと知らないから」と言われたのである。
今まで加茂の名前を出せば靡かないものはいなかった。悠斗自身容姿こそ普通であるが、成績もよく、人望も厚い方なのに、だ。
失恋の衝撃は大きい、そしてどうにかして湊の鼻をあかしたい、そんな気持ちがわいてきた。
「そうだ……！」
悠斗はいいことを思いついたように緊急の生徒総会の開催を決めたのだった。

俺はテクノブレイク後湊の意識に引きずり込まれ、今は一部として過ごしている。

美しすぎる男、湊の意識の一部になったことには驚いたけど、俺が受け取るパルスは快感だけで、後は俯瞰した気持ちで湊のことを見ている感じだ。
だから、湊がマゾで押しに弱く、そして気持ちいいことに逆らえない性格だということは嫌と言うほど把握していた。
（あぁんっ♡だめ……気持ちよくなっちゃう）
ついでに言うなら最近湊の思考が聞こえるようになった。
「あんっ♡んっ、んっ……」
生徒に乗せられビデオチャットでオナニー配信をする羽目になった湊がスマートフォンの前で一心不乱に乳首を弄っている。
どうやらネットに疎い湊は胸だけ映して顔を隠せばいいのに、顔も乳

首も見せておっぱいオナニーに耽る姿を世界中に配信しているのだ。
「ふーっ、ふーっ……」
興奮しているのか荒くなる吐息とともにどんどん激しくなっていく指の動きに俺はつい魅入ってしまう。
「あっ……あっ……イクッ！イッちゃう！」
ビクビクっと身体を震わせて絶頂を迎える湊につられて俺も興奮してしまう。意識だけで存在しているから湊の快感を受け止めて俺は今日も満足したのだった。

緊急生徒総会が開催されることになり、議題に自分が関わると言われた湊は土曜日にも関わらず出勤していた。

暁学園では生徒会は独立した機関で、自治を持ち、校則を決定する権利を持っている。そんな生徒会が緊急で開かれるうえに自分が関わっているとなると何事なのだろうかと思ってしまう。

「湊先生、時間です」

副会長が職員室に湊を呼びに来たので後をついていくと、講堂には全校生徒が集まっていた。

「それでは緊急生徒総会を始めます」

ステージに立った悠斗が開始を告げた。

「今回、湊先生公用化、新たにこの校則を設けたいとおもいます」

高らかにそう悠斗が告げ、かすかなざわめきが起こった。

「湊先生は、我々にフェロモンだけを振り回し、その責任を取ろうと